

東京蜘蛛談話会通信 No. 87 (1996年5月19日)

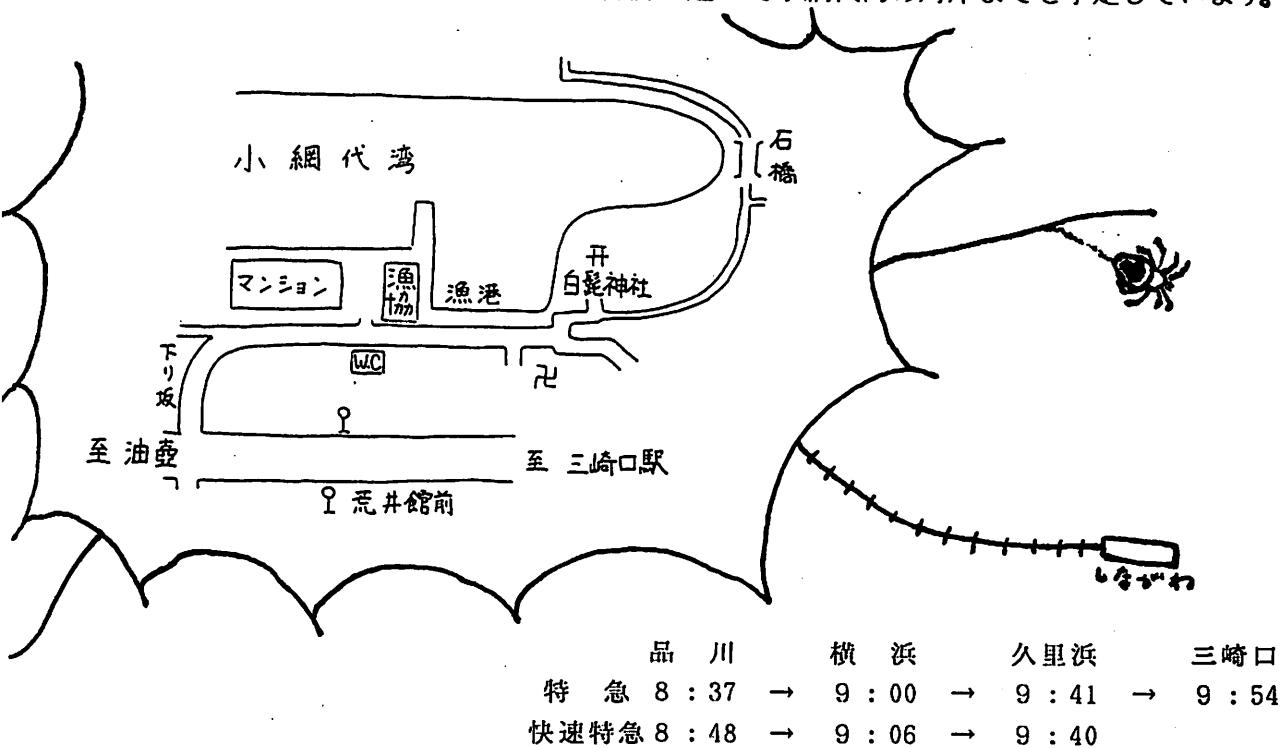
編集・書類文庫 / 印刷・本紙 東京都豊島区 光プリント

付録 池田博明

※※ 1996年度採集観察会 ※※

場 所：神奈川県三浦市 小網代の森
第2回 7月14日（日）（雨天決行！！）
集 合：京浜急行線「三崎口」駅改札口 10:00
世話人：安田明雄 045-641-0763
(谷川明男)

小網代の森へは京急バス「三4」系統油壺(マリンパーク)行きで「荒井館前」下車、徒歩15分(地図参照)。採集観察は白髭神社から石橋を通って小網代湾の対岸までを予定しています。



今後の予定 第3回 10月20日（日） 第4回 1997年2月23日（日）

No. 88 原稿締切は8月末日 笹岡まで！

1996年度総会・例会報告 #

司会進行 平松毅久 (スライド: 畑守有紀・笹岡文雄)

(1) 開会挨拶 10:05 萱嶋 泉 (2) 自己紹介 (3) 午前の講演 10:35~12:05

(4) 記念撮影 (5) 総会 13:15~14:30 (6) 午前の講演 14:35~17:05

(7) 閉会挨拶 17:05 萱嶋 泉

*講演内容 午前・①~③、午後・④~⑧

①鈴木茂生「銅育下でのネコハグモの産卵と出のう」(スライド)

②谷川明男・千田高史・熊田憲一「アカイソウロウグモの近似別種について」→講演・谷川

③池田博明「ゴケグモの毒について」

④梅林 力「銅育下におけるワスレナグモの住居および戸締まりについて」(スライド)

⑤加藤むつみ・工藤泰恵「トゲグモの卵のうと子ども達についての報告」(VTR)講演・加藤

⑥新海 明「どきどきウォッチング」(VTR)

⑦宮下 直「超小型クモ類の生活史特性」(スライド)

⑧新海栄一「ゴケグモ類の移入状況について」(スライド)

☆ 総会報告 (議長: 新海 明)

(1) 承認事項

①1995年度決算報告 (p. 6、参照) ②1996年度予算案 (p. 7、参照)

③Kishidaia の寄贈依頼について

鶴崎展巨氏から米国研究者のJames Cokendolpher氏への継続寄贈の要請がありました。 Kishidaia は図がきれいで同定の資料としても貴重な報文も多いとのことでした。にもかかわらずそれが、図書館の文献ネットワークを通じても入手できないとのことです。これはKishidaia が雑誌の分類上學術刊行物に属さないためで、今後もこの状態は変わらないと思われます。したがって今後寄贈依頼が増えた場合は、そのあり方を別途に検討することとして、Cokendolpher氏の評価にお答えすべきと決しました。

④合宿計画 1996年度 (茨城県・詳細 p.16 参照、担当・笹岡)

1997年度 (沖縄県・詳細 p.15 参照、担当・谷川)

⑤運営委員の任期満了に伴う改選について (新任期 1996~1997年度)

再任: 池田博明、小野展嗣、木村知之、久保田克哉、佐々木祐子、笹岡文雄、高橋 登、
谷川明男、萩本房枝、平松毅久、安田明雄 (11名) 退任: 稲葉茂代 (1名)

(2) 討議事項 会費値上げについて

ここ数年談話会の財政事情は悪化し、ここ3年は年10万円前後の赤字を特別会計から支出しています。そこでその状態を開闢すべく、事務局会計から討議が諮られました。年会費が相対的に安く、値上げするなら来年度でよいとの意見もありました。しかし本来特別会計とは赤字補填のためにあるということを確認し、いずれ値上げはやむなしとしたものの、残高50万円をめど (推定3~4年後) に値上げを再討議することになりました。またその間の具体的な計画案の作成は、運営委員一任となりました。

参加者: 青木重之、浅間茂、池田博明、生山健、梅林力、大川秀治、緒方和、長田佐智子、小澤實樹、小野展嗣、笠原喜久男、加藤むつみ、金野晋、萱嶋泉、木村知之、工藤泰恵、久保田克哉、小峰光弘、笹岡文雄、佐藤理子、佐藤幸子、新海明、新海栄一、鈴木茂生、高橋登、谷川明男、千田高史、新村誠、西尾三枝子、畠守有紀、伴満、平松毅久、古浜隆、増田進、水野陽介、宮下直、安田明雄、山川守、和仁道大 (39名・50音順敬称略)

*近況つれづれ・北から南へ (総会出欠ハガキからの転載です・一部編集)

- ◆吉田 哉（山形県山形市）研究の方は暇をみてやっています。採集はあまりしていませんが、記載の方を中心しています。
- ◆野崎文江（埼玉県入間郡毛呂山町）談話会通信にかきました、ジョロウグモが陽当たりのよい部屋のカモイのところに卵のうを作り(これが12月17日)2月の中旬に三匹がかえつて袋の中から上の外の膜の中にでてきました。中の膜(袋になっていて)の中では、子グモの動いているのが観察されます。今日は啓蟄、外は北西の風が吹いて、気温は6℃。部屋の中は17℃外へ出る準備をしているのかもしれません。「外へ出たら寒いよ」と思わず声をかけてしまいました。今年もどうなるか楽しみです。
- ◆西尾三枝子（埼玉県川口市）入会後観察会の日にちが会わず出席できなくて残念に思つておりました。「こども自然クラブ」なる会員制の50名のクラブを毎月活動させるという楽しいやらの一年間を送っていました。今年も続きますが子供達にクモを好きになってもらいたいと勉強したいと考えています。
- ◆阿部代始子（千葉県千葉市）十八日は大雪でしたが、参加された方がおられたのか知りたいところです。当日は千葉で照葉樹林シンポジウムがあり、前日参加の加藤むつみさんがいないので、「雪をかきわけクモ？」と電話ついでに聞いてみたら、冬ごもりしていたとのこと。(中略)現在千葉中央博でシダ標本整理をボランティアでやっていますが、科博からの二十万点も加わった膨大な量を一人で細々と。間違い同定もあるので、勉強せざるを得ず、生えているところを見ないとなかなか覚えられずで、先週はヤンバル、石垣、西表で一週間シダをひたすら見てきました。蛇をやっている人に遺書を書いて行けとおどかされたのですが、沖縄県博でやっとハブに会えました。お元気で。
- ◆長島 充（千葉県佐倉市）1月の暖かい日に伐採されたアカマツ林の倒木より採集したオビボソカニグモ亜成体数個体を飼育中、4月に入ってそのうちの1個体が無事りっぱな触肢を持った♂の成体となりました。記念にマクロレンズで撮影しました。
- ◆生山 健（千葉県松戸市）就職してから約1年、忙しい日が続き、採集等は休んでおります。学生時代の観察は早目に発表したいと思っております。
- ◆増田 進（千葉県野田市）現在私は野田市のキッコーマン(株)研究本部に勤務しております。クモについてはまったくの素人ですが、簡単な分類などができるようになればと思っています。
- ◆石川みどり（東京都杉並区）昨年12月10日、駒場住区センターでは関西から帰られたばかりの新海さんの興味深いお話／スライド、そして生きている”セアカゴケグモ”におめにかかり(?)これも蜘蛛談話会おかげとありがとうございました。セアカゴケグモはとても美しく可愛いでした。
- ◆小野展嗣（東京都新宿区）研究室の改装工事のために1月から3月末までほとんどまともな活動はできませんでした。いろいろなご質問や同定依頼になかなかお応えできずに申

郵便振込口座番号 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会

し訳なく思います。むずかしいものほど遅くなります。登れば登るほど高くなる階段なんてあるんでしょうか。

◆梅林 力（東京都杉並区）毎日、元気にのんびり、採集・観察と楽しくやっています。あまり真面目に緻密にやっていないのでお恥ずかしい……。そのうちそのうちと言いながら……。そのうち、しっかりしたことをやりたいと思っています。

◆小澤實樹（東京都世田谷区）クモ観察時間は少ないのですが、元気でやっています。

◆加藤ななえ（東京都小平市）せめて、身近なクモの名前だけでも知りたいと入会させて頂いて一年ですが、皆さんとてもくわしくて、また親切に情熱的に教えて下さるので、採集観察会がとても楽しみです。

◆佐藤理子（東京都保谷市）私としては、まずクモを知る上でどんな図鑑がよいのかという辺りからおしえて頂かなくてはなりませんのでいろいろな方にお目にかかるのが楽しみです。

◆中島祥吉（東京都町田市）生態系の一員としてくもの存在は重要だと思います。基礎的なデータの蓄積をしてその役割を解明するようにしましょう。

◆小峰光弘（東京都武蔵野市）3つ4つの観察会の役員や幹事をしていますので談話会の定例観察会には時々欠席してしまいましたが、冬はフィールドがさびしいのですが土壌動物や虫たちの冬越しの観察で子供たちは盛り上がります。クモの越冬を調べさせると子供たちは結構めずらしい種を見つけるものです。先日娘が中米のジャマイカへいつていきましたがクモ好きの私にと沢山のクモグッズを買ってきましたので今度のクモグッズ大会で（次回はいつやるのかな？）見てもらいます。

予定しておりますが現在当方の収集品がとんと増えておりません。もう暫くお待ち下さい。 前回主催者：笹岡

◆新村 誠（神奈川県川崎市）昨年の高知合宿からはすっかりトリ屋、モリ屋が忙しく、クモにはとんとご無沙汰となってしまいました。再スタートの刺激を受けるべく総会に期待しております。今年こそ基本50をマスターして少しはクモ語を理解できるようになります。

◆秋元 昇（神奈川県横浜市）勤務している都立高校で「真正クモ類研究会」を設立して二年が経ちました。同好会から部への昇格を望んでいますが、相変わらず生徒が集まらず、廃部の危機にさらされています。少し暖かくなると、顧問の自分だけが一人で活動しているのが実態です。昨年の文化祭でも、「魅せますクモの世界」と題して、展示発表を行ないましたが、一部の人にしか見てもらうことができませんでした。苦労してみつけたスズミグモの興奮は誰にも理解されなかったようです。新しい展開があったらお知らせします。

◆織茂尚子（神奈川県横浜市）今年度の採集会が小網代の森になったので喜んでいます。近いので母とまた出席したいと思っています。よろしくお願ひします。

会費は単年度で

一般￥2,800

学生￥2,000

◆佐藤幸子（神奈川県横浜市）今年に入って急に寒くなったので、思いもかけず体調をくずしました。暖かくなったら元気になると思います。家の中に時々姿を見せていた『アシダカグモ』が、寒気の最中に死にました。とても残念です。♀の成体でした。

◆谷川明男（神奈川県横浜市）オニグモ類の整理をしていますが、標本が不足して困っています。本物のヤミイロオニグモの♀、コケオニグモの♀、ダンダラオニグモの♀、キタグニオニグモの♀♀。これらの標本を所有されている方はいらっしゃいませんか？

◆赤羽尚夫（神奈川県厚木市）クモの切手を集めておりますがなかなか集まりません。現在までに収集できたのは、12カ国25種類です。種ではコガネグモ科が殆どで、他にコモリグモ科、ヒメグモ科、サラグモ科などです。また、発行されている国は、いわゆる発展途上国ばかりのようです。クモの切手の情報があれば教えていただきたく思っております。英國の「自然史博物館」のクモのコーナーを見学し、内容の良いのに驚きました。

◆浜岡史子（神奈川県秦野市）いつもお世話になっています。

◆畠守有紀（大阪府交野市）私学の高校の生徒会等でこきつかわれています。朝は6:00に頃に家を出て、帰宅は夜7:00頃に帰宅する毎日です……。これはトタテグモのリズムにあわせていた人間にはツライかも。

◆鶴崎展巨（鳥取県鳥取市）年末の「セアカゴケグモは無害」報道にいまだに怒りをおぼえています。胸をなでおろした人も多いかもしれません。クモの研究者は正確な知識を伝える責任があります。オーストラリアの研究者は日本の無害報道を憂慮していることを知っておいて下さい。Dr. Robert Raven がwwwのホームページでセアカゴケグモの生態、日本での報道等の紹介をしていますのでインターネットを使える人は一度みて下さい。

<http://www.uq.edu.au/~qmrraven>です。

◆中平 清（高知県吾川郡春野町）小生「クモの出糸突起の向きと食性との関係」をテーマにして久しいですが、いっこうに進展しませんでした。やはり向う意気が強いときでなければ、駄目ですね。

出欠のハガキをいただいた方々（50音順・敬称略）

（出）加藤むつみ、萱嶋 泉、工藤泰恵、新海 明、鈴木茂生、宮下 直、和仁道大
（欠）木庭 奏、東條 清、藤井靖浩、その他無記名1名

会計は 安田明雄 〒231神奈川県横浜市中区元町5-219

東京蜘蛛談話会 1995年度決算報告			
科 目	収 入	支 出	備 考
会 費	1, 146, 800		欄外①参照
寄 付	35, 150		
別 刷 代	10, 000		
別 刷 送 料	1, 340		
会誌作成繰越	214, 892		
会誌作成費		211, 768	
会誌発送費		59, 200	
談話会通信費		127, 731	
名簿作成費		23, 270	
そ の 他		20, 600	小林裕生告別式へ生花
報 酬		18, 500	各局通信事務費
前納会費繰越		584, 000	
会誌費・発送費として繰越		240, 000	
特別会計へ繰入		123, 113	
計	1, 408, 182	1, 408, 182	
収 支	1, 408, 182 - 1, 408, 182 = 0		

東京蜘蛛談話会特別会計			
積立金	709, 899		1994年度までの積立金残高
1995年度から繰入		123, 113	
収 支	709, 899 + 123, 113 = 833, 012		
積立金残高	833, 012		1995年度決算時現在

欄 外

① 未納分後納	48, 800
1995年度前納繰越	346, 000
1995年度当年度納入	168, 000
1996年度前納繰越	344, 800
1997年度以降前納	<u>239, 200</u>
	1, 146, 800

以上相違ありません。

1996年4月28日

会計：平松毅久

会計監査：笠原喜久雄・鈴木成生

東京蜘蛛談話会 1996年度予算			
科 目	収 入	支 出	備 考
会 費	573, 200		欄外①参照
会誌作成繰越	240, 000		
特別会計より繰入	91, 870		
会誌作成費		540, 000	欄外②参照
会誌発送費		170, 100	欄外③参照
談話会通信費		131, 470	欄外④参照
その他の資料・報酬		28, 500	欄外⑤参照
事務一般費		35, 000	欄外⑥参照
計	905, 070	905, 070	

① 一般	2800×194	543, 200	④ 通信87号	17, 000
学生	2000×15	30, 000	通信88号	17, 000
合計	209名	573, 200	通信89号	17, 000
② キシダイア70号		180, 000	通信発送	
71号		180, 000	90x211x3	56, 970
72号		180, 000		
合計		540, 000	例会用送信ハガキ	
			50x208x2	23, 500
③ 70号	270×210	56, 700	合計	131, 470
71号	270×210	56, 700		
72号	270×210	56, 700	⑤ その他の資料	10, 000
合計		170, 100	本部通信事務費	2, 000
⑥ 事務一般費		10, 000	事務局通信事務費	5, 000
発送用封筒印刷		25, 000	団体会員通信事務費	5, 000
合計		35, 000	通信機器通信事務費	6, 500
			合計	28, 500

1996年4月28日 事務局・会計：平松毅久

1995年度会員動向

1995年4月1日現在の会員数 201名

入会14名、退会8名（希望2名、規約4名、逝去2名）

1996年4月1日現在の会員数 209名（一般194名、学生15名）

（別に休会扱い1名）

大雪！の中の懲りない面々

新海 明

またまたやってしまいました。東京クモ談話会のメンバーはやはり世の中の平均的な人物像とは少々ズレているようあります。「アタリマエダ」という声が聞こえてくるような気がしますが・・・。2月18日。かつては東京都の私立高校の入学試験日に当たっており、この日は雪の降る特異日ではないかと思われるほどよく大雪に見舞われたものです。私も某私立高校に在職したおりには受験生がすべらぬ（！）ようにと校庭の雪かきなどをよくやらされました。

この日は今年度最後の田無の東大演習林での採集会。朝起きると前夜来の雪はいや増すばかり、雪に煙る立川の市街は一面の銀世界になっていました。私ですらほんの一瞬「こんな雪の中でやるのかなあ」と思うほどでした。でもすぐさま「やるよなあきっと、たくさんの人人がきているんだろうな」と思い返したものです。幸いにも東京近郊のJR私鉄共にほぼ平常通りの運転で、集合時刻の午前10時少し前にひばりヶ丘駅に到着しました。階段を下りると談話会の旗を持った笹岡さん貞元さん宮下さんがすでに待っているのが見えました。そのそばに何やらあやしげなおじさんが一人。私と宮下さんにいきなり話しかけてきました。「クモ談話会とはおもしれえな」とか、駅前で賛美歌を歌い「種を（じゃない）主を信じなさい」と勧誘するキリスト教会の人たちに「あいつらは詐欺師だ」「あんたたちの方がまだましだ」（おおきに、ほつといて）とかしきりに話かけてくるのであります。結局、このおじさんは降雪で競馬が中止になったため競艇へ乗り換えるかどうかと駅前で迷っていただけのようでした。その後、平松・中野・千田の各氏が揃いいざ出発とバスに乗り込むと谷川さんが遅れてやってきました。「やっぱりこんなに来ていた！」が第一声でした。揃ったメンバーを見回して「予想に反して来てないのは池田さんだけですね」とのこと。なるほど、その通りだ。吹雪の小田原で遭難したのかも知れない。

田無演習林に到着すると、ワープして別世界。「北海道」が限りなく続くのみでした。こうなると採集ポイントは樹皮や石や倒木の下しかない。建物も点在しているからその軒下なども要注意だろう。樹皮をはがすと早速キハダカニグモとキハダエビグモがころりと出てきました。でもさすがにまったく動きません。雪の上に落ちてもそのままの姿で横たわったままでした。コカニグモも樹皮の間にじっとしていました。ハエトリグモの幼体が暖かそうな袋の中に潜み、ヒラタグモの親子は一階に子グモ二階に母グモとひとつの住居内で春の訪れを待っているかのようでした。軒先に吹き寄せられた雪をかぶっていない落葉の中も探ってみましたが、一向に見つかりません。この寒さではクモも死んだように身をぢぢめている以外にないのでしょう。動いてくれないと一層みつけにくくなるものだということを嫌というほど実感させられました。一時間も野外にいると寒気がまわりからせまってくるようでもう限界でした。この辺で弁当にしようということになり、演習林の温

「通信」原稿は 笹岡文雄へ 〒170東京都豊島区北大塚3-12-21

室内にもぐりこみました。隙間だらけのガラス部屋ではありました。雪中にあった身から思えば天国のような環境です。ほの暖かさの残るシャケ弁のなんとうまかったことか。すると匂いにつられてどこからともなく野良ネコがわいてきたではありませんか。いかにも哀れそうな声で鳴くので、平松さんは「三味線にしてまうぞ」といいながらも弁当のおすそわけをしていました。

午後になると空は明るくなっていましたが、陽がさすほどではありません。初めは意気盛んだった8人衆もなんとなく元気がなくなっていました。やはり、雪の上は寒いのです。しかし、その中にあっても貞元氏だけは相変わらず精力的に樹皮をはがしたり、藪の中を探っていました。もう彼に任せるしかないなという私の思いは皆の思いでもあったようです。さすがでした「脱帽」。寒さでなすすべもない他の7人は演習林の入口付近で、ただ靴で雪を踏み固めるだけでした（これって面白い習性ですね。私を含め不思議と皆一心にやっていましたよ）。午後3時頃に最後の「クモ合わせ」（談話会用語で種類数の確認作業のこと）をすると、なんとこの雪の中で25種類余り採れたとのことでした。冬季の採集会でも例年なら70~80種とれているので、なんとも少ない数ではありませんが、この大雪の中での状況を考えれば善戦であったのではないでしょうか。

この後、談話会8人衆は田無の大雪原をあとにして暖をとりに、一路ひばりガ丘駅前の飲み屋へと向かったのは言うまでもありません。「雨、台風、大雪とみなやってしまったのであとは槍と鉄砲弾くらいしか降るものも残っていないなあ」とは、そのときの皆の弁でした。「これからは通信にもそう書いておいたらどうでしょうか（貞元氏談）」。やれやれ、まったく本当にごくろうさまでした。

*採集観察会中間報告 第4回 1996年2月18日(日) ^{手!}担当:宮下、笹岡(集計・笹岡)
参加者(50音順、敬称略): 笹岡文雄、貞元己良、新海 明、谷川明雄、千田高史、中野隆雄、
平松毅久、宮下 直 (以上8名)

トタテグモ科	キシノウエトタテy
ジグモ科	ジグモy
ユウレイイグモ科	ユウレイイグモFM y
ヒメグモ科	ヒメグモy オオヒメグモmy e バラギヒメグモy ムナボシヒメグモy
コガネグモ科	オニグモy ヨツデゴミグモm ジヨロウグモe
アシナガグモ科	シロカネグモ sp. y ウロコアシナガグモy
ヒラタグモ科	ヒラタグモF y e
フクログモ科	ムナアカフクログモy
イヅツグモ科	イヅツグモFM
エビグモ科	キンイロエビグモy キハダエビグモF f m
カニグモ科	コカニグモF y キハダカニグモF クマダハナグモy
ハエトリグモ科	アリグモy チヤイロアサヒハエトリy マダラスジハエトリf カラスハエトリy

計23種

略号 F(♀成体) M(♂成体) f(♀幼体) m(♂幼体) y(性別不明幼体) e(卵)

記録 記録 記録 そして…

この採集観察会の参加者は第1回から、29名 → 37名 → 39名。ここまで平均なんと、35名、談話会始まって以来の記録達成か！。それも最期は15名参加で、平均30名以上の大記録と思つたのですが…。ところが期待の最終回はトホホの大雪と相成り、「91の埼玉・巾着田10月以来の1ケタの8名となってしまいました。そして平均も28.25名と、からくも30名には達せず。

そこでこの10年はどうなっているかと調べてみると、下記の通りになっていました。つまりそれでも'95年度がダントツ1位だったのです。さらに過去は1日あたりの人数ですら'90神奈川・神武寺10月の27名が最高でした。この平均値はそれすらも超えてしまったのです。

さらに'95年度は毎回参加者数の記録を更新し続けていたわけです、最期を除いて。そして10月に記録した39名は、恐らく過去の談話会採集観察会史上、最高の参加者数と思われます。（参加者が多ければいいってもんじやない！などといわないで下され）

過去10年参加者数1日平均

'86山梨・鳥沢、 未発表 '87神奈川・丹沢大倉、 13.25名 '88東京・野津田、 10.25名

'89東京・八王子城跡、 15名 '90神奈川・神武寺、 15.75名 '91埼玉・巾着田、 14.75名

'92東京・五日市横沢入、 21.5名 '93神奈川・飯山観音、 未発表 '94埼玉・高山不動、 17.25名

過去10年参加者数ベスト・ワースト

*ベスト

1 '95東京・田無10月 39名 2 '95東京・田無7月 37名 3 '95東京・田無5月 29名

*ワースト

1 '88東京・野津田7月 5名 2 '91埼玉・巾着田10月 7名

3 '87神奈川・丹沢大倉5月、 '88東京・野津田5月、 '95東京・田無2月 8名

(笹)

* * 事務局・会計だより * *

会員移動 1996年1月中旬～1996年4月中旬

(住所変更等)

田副 幸子：〒235 神奈川県横浜市磯子区洋光台5-14-22

苅部 幸世（旧姓：垂沢）

久保田克哉：〒418 静岡県富士宮市小泉2024-1 塚営住宅202

熊田 憲一：〒510-111 三重県四日市市水沢美里ヤマギシズム社会水沢美里実顕地

板倉 泰弘：〒444 愛知県岡崎市東大友町字松花86-1-103

荒金 泰子：〒870-111 大分県大分市田尻グリーンハイツ東区9-138

貞元 己良：〒274 千葉県船橋市前原東5-42-12

(入会)

小川 光昭：〒727 広島県庄原市西本町1-7-24

竹内 慎：〒229 神奈川県相模原市相原3-22-6

増田 進：〒278 千葉県野田市野田3-9-9 キッコーマン研究本部第4グループ

(退会)

田中 勝子（希望）、新井 弥生、馬場 武彦、山田三重子（以上規約）、濱田 龍一

(逝去)

『会費受領』 1995年 9月上旬～1996年 3月下旬（敬称略）

1994年度

米田 宏I036, 高橋 米夫I040, 国見 裕久I041, 萱嶋 泉K001, 川崎 慎二I115
関口 晃一I116, 井原 庸I120,

1995年度

吉田 哉I035, 米田 宏I036, 福田 英克I038, 松田まゆみI039, 高橋 米夫I040
国見 裕久I041, 秋元 昇M001, 林 俊夫M002, 鶴崎 展巨M003, 安藤 昭久I044
萱嶋 泉K001, 小川 光昭I045, 佐々木勝實I046, 野崎 文江I053, 小池 牧子I070
大利 昌久I072, 萱嶋 志門I080, 山本 一幸I083, 川崎 慎二I115, 関口 晃一I116
井原 庸I120, 宮島 仁I122

1996年度

米田 宏I036, 長島 充I037, 高橋 米夫I040, 国見 裕久I041, 鶴崎 展巨I042
牧 孝匡I043, 安藤 昭久I044, 萱嶋 泉K001, 小川 光昭I045, 織茂 尚子I048
赤羽 尚夫D019, 大川 秀治D020, 小峰 光弘D021, 笹岡 文雄D022, 佐々木祐子D023
佐藤 幸子D024, 新海 明D025, 畠守 有紀D026, 伴 満D027, 前川 隆敏D028
鶴田 忠雄I049, 藤井 靖浩I051, 徳本 洋I052, 佐藤 理子I054, 竹内 慎I056
増田 進I057, 小笠原幸恵I059, 西尾三枝子I060, 引田 和明I061, 吉倉 真I063
松田 浩二I064, 鈴木 成生I065, 横山 和正I066, 石川みどりI067, 長井 芳夫I068
日下部光代I069, 小池 牧子I070, 加村 隆英I071, 福島 彬人I074, 高津 佳史I075
工藤 泰恵I076, 佐久間良三I078, 吉田 哉I079, 佐々木智雄I081, 鈴木 勝浩I082
山本 一幸I083, 秋元 昇I084, 和仁 道大I085, 小川 敦央I086, 宮本 美織I087
東條 清I088, 朝倉 幹晴I089, 阿部代始子I090, 林 俊夫I091, 井野 文雄I092
近藤 昭夫I093, 水野 陽介I094, 及川 照代I096, 守 桂子I097, 福田 英克I098
古川 渉I099, 莢部 幸世I100, 芦田 喜治I101, 新村 誠I102, 加藤ななえI103
田副 幸子I104, 中平 清I105, 生山 健I107, 緒方 清人I108, 福本 伸男I110
佐藤 和昭I111, 中島 晴子I112, 立川 晴二I113, 谷川 明男I114, 関口 晃一I116
諏訪 哲夫I117, 加藤輝代子I118, 井原 庸I120, 宮島 仁I122

1997年度

長島 充I037, 鶴崎 展巨I042, 牧 孝匡I043, 小川 光昭I045, 小川 新哉I047
佐々木祐子D023, 佐藤 幸子D024, 鶴田 忠雄I049, 田中 穂積I050, 畠守 有紀I055
竹内 慎I056, 浜口 哲一I058, 西尾三枝子I060, 引田 和明I061, 鈴木 成生I065
徳本 洋I073, 北島 博I077, 吉田 哉I079, 東條 清I088, 織茂 尚子I095
守 桂子I097, 加藤ななえI103, 高橋 登I106, 生山 健I107, 木庭 奏I109
中島 晴子I112, 加藤輝代子I118, 木村 知之I119, 千国安之輔I121, 宮島 仁I122

1998年度

小川 光昭I045, 佐々木祐子D023, 鶴田 忠雄I062, 木庭 奏I109

1999年度

小川 光昭I045, 鶴田 忠雄I062, 木庭 奏I109

寄付 中平 清 15000円, 萱島 泉 11600円, 木庭 奏, 関口 晃一 1600円
以上の方々からご寄付をいただきました。どうもありがとうございました。

神奈川県高文連理科研究発表

大会発表要旨

侵略と撲滅の生態

酒匂川の河川敷

県立山北高等学校

自然科学部生物班

長谷部勉

神野成章

河川敷は不安定な環境で、増水のたびにそこに住む生物群集は擾乱される。植物では、このような環境に侵入し定着する種は国外からの帰化種であることが多い。おそらく動物でも同様と思われる。

1995年の秋から始めた酒匂川の河川敷のクモ調査の結果、外国から侵入した注目すべき種ゴマダラヒメグモを多数発見した。期せずして、本調査期間（1995年11月）に、大阪府と三重県で、有毒種セアカゴケグモ約2000頭が捕獲され、その駆除や防除が問題になった。神奈川県下でも横浜の本牧埠頭でハイイロゴケグモの集団が発見された。実は、これら有毒なゴケグモは、ゴマダラヒメグモに形態的にもっとも近く、生態もほとんど同じである。したがって、これら河川敷のクモの分布および個体群動態は、ゴケグモの帰化など将来を考察するうえで貴重なデータとなるものと私たちは信じている。

かながわ

調査をしてしまったのは同窓会生物部の二年、神野成章君、長谷部勉君。二人は日本ゴモ学会の会員でもある同窓会池田明徳君の指導を受け、九月三十日から、流域の七ヵ所でクモの種類調査を始めた。

ゴマダラヒメグモが最初に見つかったのは、同窓会辺の酒匂川の河原の下流下。一方、当惑する声が聞こえて、「千匹を超える数体がいると思われる」という。分布は山北駅付近から下流に集中。神野君と長谷部君は、酒匂川に繁殖していることに興味を持ち、「酒匂川は外洋種しか見つかっていないゴマダラヒメグモが、酒匂川に生息しているのかを探ること」という。

酒匂川流域で繁殖

山北高の生物部確認 来月、研究会で発表

調査を進めていた間に、ゴマダラヒメグモが増殖している。これが「セアカゴケグモ」と同じゴマダラヒメグモで、もうとおり神野君も興味が増したという。一人は来月十三日に横浜市西区の青少年センターで行われる「高校文化選択研究大会」で発表しようとしている。

1995.12.14

神奈川新聞より

ゴマダラヒメグモ こちらは無毒

「酒匂」こと轟がれた「セアカゴケグモ」に悩めて近い初級の「ゴマダラヒメグモ」が、山北町から小田原市にかけて流れる酒匂川の河原でいる。これが山北高校生物部の調査でわかった。これまで県内では相模川流域で数起確認されているだけ。これが「無毒」のクモだが「外来種のクモ」が話題になったために同生物部の部員のみ、研究結果を来月十三日の校文化選択研究大会で発表するが、道幅に力を入れてこい。



各地の同好会から ②

日本には東京蜘蛛談話会の他にもクモの研究グループがいくつかあります。ここではこれらのグループの定期刊行物などの活動内容を紹介したいと思います。

* 関西クモ研究会（会長：西川喜朗）

会報「くものいと」を年2～3回発行。採集会・研究会例会などを年数回実施。

くものいと 19号（1995. 12. 31発行）

田中穂積 ---- ゲホウグモとウサギ

吉田真 ---- ゴケグモ騒動

新海明・金野晋 ---- 九州（大分県・宮崎県）のクモ

加村隆英 ---- その後のタランチュラ

石丸智早 ---- 妙見山観察会に参加して

入会申し込み 〒567 茨木市西安威 2-1-15 追手門学院大学生物学研究室内

関西クモ研究会

Tel 0726-43-5421 （内線 5113 西川研, 5106 加村研）

会費 年1000円

* 中音昆虫学会（代表：村上 勝）

会報「蜘蛛」を年1回、「まどい」を年数回発行。採集会・例会を年数回実施。

蜘蛛 28号（1995. 12. 31発行）

徳本洋 ---- 金沢市でのクロガケジグモの発見ならびにわが国における
ガケジグモ科外来種情報の検討

福島彬人 ---- スズキコモリグモについて～飼育記録から～

緒方清人・小笠原幸恵 ---- 名古屋市の真正クモ類について（2）

畠守有紀 ---- ワスレナグモの体サイズについての若干の考察

小笠原幸恵 ---- カグヤヒメグモの脱皮後の行動とオニグモの捕虫について

新海明 ---- 郡上八幡とクモ

短報 小笠原幸恵：線虫に寄生されたクモ2種について、緒方清人：マダラヒメグモ
を愛知県で採集する、村上勝：オダカユウレイグモ 名古屋港で採集、須賀
瑛文：名古屋港付近のマダラヒメグモの生息地と環境、益田和昌：瀬戸市海上
の森の多足類、益田和昌：犬山市善師野のヤステ、益田和昌：くらがり渓谷（

事務局は 平松毅久 〒350埼玉県川越市上戸91-3 瀬尾荘202

愛知県額田町) のヤスデ

入会申し込み 〒444 岡崎市伊賀町 4-62-3 (事務局)

板倉泰弘 Tel 0564-22-2894

会 費 年2500円 (準会員 「まどい」のみ500円)

*三重クモ談話会 (本部 太田定治)

会報「しのびぐも」を年1回発行。採集会・合宿・例会などを年数回実施。

しのびぐも 23号 (1995.12.31発行)

新海明 ----- ムネクロサラグモの交接の観察

武藤茂忠 ----- 四日市市市内の公園地区におけるジョロウグモの生息状況

武藤茂忠 ----- 観測した近年の気まぐれ気象

福島彬人 ----- 再び クモ三題ばなし

貝発憲治 ----- 松坂・飯多地域の真正クモ類

徳本洋 ----- 松坂市櫛田川で採集された真正クモ類

小笠原幸恵 --- メガネヤチグモの卵のうと仔グモの習性について

入会申し込み 〒515 三重県松阪市久保町 1843-157 貝発憲治 (事務局)

会 費 年1500円

*九州クモの会 はここ数年間は会誌などの発行はありません。

*和歌山クモの会 は会誌などの発行はありません。

*関西クモゼミ

毎月1回 第2か第3土曜日に滋賀県草津市の立命館大学で開催。

会費などなく誰でも参加できる。

連絡先 立命館大学理工学部生物地球科学研 0775-61-2660 吉田真

*東京クモゼミ

毎月1回 第1日曜日に千葉県市川市の加藤輝代子宅 (96年4月からは東大農学部)
で開催。会費などなく誰でも参加できる。

東京クモゼミ報告 (プリント) を配付。

連絡先 0425-22-2605 新海明

(新海 明)

KISHIDAIA 原稿は 木村知之へ 〒215神奈川県川崎市麻生区東百合丘4-38-12

▼△ 1997年度合宿について (予告) △▼

担当: 谷川明男

東京蜘蛛談話会の 1997 年夏の合宿を次のように沖縄で実施したいと考えています。かなり先の話ですが、ピークシーズンの沖縄ですので早めに対応していきたいと思います。

日程: 1997年7月25日(金) ~ 7月28日(月) 3泊4日

宿泊: 名護市344 山田荘 0980-52-2272

行程:

7月25日(金)

東京 ————— 那覇 ————— 中城 or 数久田 ————— 名護
飛行機 路線バスあるいは貸し切りバス
東京発 10:30~11:30くらい。

7月26日(土)

名護 ————— 旭川 ————— 名護
貸し切りバス? 詳細未定。
夜間観察は名護城跡。

7月27日(日)

名護 ————— 琉球大学与那演習林 ————— 名護
路線バスあるいは貸し切りバス
夜間観察は名護城跡。

7月28日(月)

名護 ————— 那覇 ————— 東京
路線バス 飛行機
名護で観察してから帰るなり、那覇に来てから時間をとるなり自由行動。
空港再集合。那覇発 14:30~15:30くらい。

▽▲ 1996年度夏合宿案内 ▲▽

日時：1996年8月4日（日）～6日（火）（雨天決行）

場所：茨城県久慈郡大子町

宿舎：余暇活用センター やみぞ

→ 宿舎に現地集合

J R 水郡線常陸大子駅よりバスにて約15分

茨城県北、栃木と福島に挟まれた地域になります。宿舎を中心に八溝山、月待ちの滝、袋田の滝、男体山周辺にて観察採集を予定しています。

交通：

(1) 鉄道

①上野 → 水戸 → 常陸大子 ②郡山 → 常陸大子
J R 常磐線 J R 水郡線 J R 水郡線
(スーパーひたち 66分) (窓 89分) (窓 133分)

(2) 自動車

①常磐自動車道 那珂 I. C. → 国道118号を北上 (50分)
②東北自動車道 宇都宮 I. C. → 国道293号で栃木県馬頭町
馬頭町(一部県道) → 国道461号で大子町 → 国道118号を北上

費用： (×宿泊日数) (保険料等雑費)

宿泊費（1泊2食）大人一人（中学生以上）7,200円 + 2,000円

申し込みは必ず下記の用紙で郵便にてお願いします。電話でのお申し込みはご遠慮
下さいますようお願い致します。お申込み頂いた方は後ほど別途にご案内申し上げま
す。 6月30日必着

担当： 笹岡文雄 〒170東京都豊島区北大塚3-12-21

87-(16)

切 ケ 取 サ 線 -----

1996年 月 日

・住所 〒

・電話 ()

・氏名

(年齢 歳)

→旅行保険に必要ですのでご記入お願いします。

自動車で参加（します・しません）

合宿に参加（全日、4～5日、5～6日）を申込みます。

該当箇所に○をして下さい

いつかどこかで

小野展嗣

1981年秋

私は、ブーフメッセで通訳のアルバイトをしていた。フランクフルトのブーフメッセは毎年1回この時期に開催され、本の見本市としてはヨーロッパでもっとも規模の大きいもののひとつである。世界中から集まった出版社が広い会場にところ狭しとブースを並べる。日本の見本市は企業の宣伝の場という感じが強いが、ドイツのそれは大切な商談の場もある。そのため、一般的の入場ができない日が期間中何日がある。とくに最後の日は、展示してあった本を処分してパーティーの費用の足しにでもしようとする業者があるので、自分のブースをほったらかしにして会場内を走りまわる人もいる。終わりの時刻が近づくと、拍手が起こったり、ゼクトで乾杯する声が聞こえてきたりして、会場内に一種の連帯感が醸し出される。

私にとってその仕事は、とても魅力的であった。ギャラが良いからだけではない。世界中の出版物に関する最新の情報がそこで手にはいるからである。そして、良い情報を得るには、まず何よりも関係者であることがだいじなのである。私は丸善や講談社の仕事を手伝った。そのほかいろいろな出版社のスタッフが日本から来歩いて、なかには保育社の今井悠紀氏や平凡社の下中弘氏など常連の人たちもいた。

あるとき、そういう人たちや通訳の女性たちとワインを飲みにいく機会があった。その席で私は、当時保育社の副社長だった今井さんに、八木沼先生の蜘蛛図鑑のすばらしさや、海外での高い評価のことや、全面改訂の必要性などについて述べた。とくに私が強調したのは、急速な分類学の進歩のために学名にかなりの変更を要すること、普通種でありながら図鑑に載っていないものが多くあること、一般の人がこの図鑑を使って同定をする場合科や属の検索がうまくできないこと、八木沼先生の「弟子」が大勢いてそれぞれクモの科ごとに研究を進めているので、分担執筆すれば短期間にかなり精度の高い増補ができることなどである。

それはその場の思いつきではなかった。1960年の初版以来多少の改訂はあ

ったが全体的に見て図鑑の内容はほとんど変わっていなかったし、かねて八木沼先生から、保育社に改訂版を依頼しているがなかなか出してくれないという話を聞いていたからである。今井さんは渋い顔をしていた。当時私は20代なれば、今井さんも若くみえた。

1984年 暮れ

帰国して1年、私は博物館の公務の合間、ドイツで行った研究をもとに学位論文の仕上げに取り組んでいた。八木沼先生には学位の審査に加わっていただくことになっていたので、その内容を逐一報告していた。

あるとき、保育社が蜘蛛図鑑の全面改訂版を出すことになった。大きい版の図鑑をすべて廃刊にして小さい版に統一することだった。八木沼先生によれば、クモの図鑑は売れないで保育社としては絶版にしたいところを今回が最初で最後ということで出してもらうことになったとのことである。だから原色図はあまり増やせないという。私はそのときは正直、良かったと思った。あのとき今井さんにいろいろ言ったことが無駄にはならなかったと思った。

しかしそれからの展開は私の予想とは全然違っていた。八木沼先生は若手の研究者のほぼ全員に依頼状を出して図鑑改訂への協力を要請された。それは、「君の専門の分野について書いてくれ」というものではなく、「その分野の最新の知識を提供してくれ」という依頼だった。私は少なからず失望して、いろいろな人に意見を聞いてみた。それを受け取った人の反応はまちまちだった。ある人は憤慨して、まったく協力しないといった。また、ある人は自分には協力する実力はありませんと言ってお茶を濁したという。しかし、喜んで協力すると言った人もいたし、たいしたことじゃないですよという人もいた。

私の場合、そう簡単には割り切れないものがあった。学位論文の中で私はカニグモ科のほとんどの属種に分類学的な検討を加えていた。しかしそれが印刷、公表されるのは審査に合格して学位をもらってからだからずっと先のことになる。〔実際に私の学位論文が印刷されたのは1988年、八木沼先生の図鑑が出てから2年後のことだった。〕八木沼先生はその中味をすべてご存じだったので、それを図鑑に使いたいというのである。私は困惑したが、目上の人にもはっきりものを言う西洋流の習性が抜け切らないうちだったので、未発表の事柄や新種などは私の文責ならば結構ですと返事した。八木沼先生はわりにこういうことには

無頓着なところがあるって、図鑑は日本語だし、論文ではないから先に発表したことにはならないとおっしゃる。一方では、私たちの論文の中に図鑑を引用していないとご立腹のことがしばしばあったし、初版には立派な新種記載まで載っていて、まったく矛盾する話なのである。しかしこうした議論を突き詰めていくといつも、「クモは私のすべてですからクモについてのあらゆることを知っていたい。全部一緒に棺桶にはいります。」と引導を渡されてしまう。事態を収拾する道はひとつしかないと思った。

1985年 春

何度かの「夜9時過ぎの電話」でのやりとりを経て、私は先生が図鑑にどれとどれを載せたいのかをお伺いし、それに必要な事柄を学位論文の中から取り出して大急ぎで論文の原稿をまとめた。そしてそれをドイツに送ってマーテンス教授に校閲をお願いし、国立科学博物館の研究報告に載せてもらうことにした。その間わずか4ヶ月。たいへんな作業だった。1985年の3月に唐突に発表した独文の論文がそれである。そのなかで私はキハダカニグモ属とオチバカニグモ属の違いを明らかにしたほか、ガザミグモ、ギョウジャグモ、コキハダカニグモ、アマギエビスクモやクロボシカニグモなど、いくつもの重要な事柄についての検討結果を報告した。これによって学位論文の新鮮さが何割か減ってしまったので、私にとっては不本意なことであったが、しかたがないと思った。

この論文はまた別の効果をもたらした。ドイツ語ではわからない、読めないという声が聞こえてきたのである。アルファベットを使っている国の人には理解してもらえるのだが、確かに日本ではそうかも知れない。青木淳一先生も始めのころドイツ語で論文を書いておられたが、キザだとかなんとか言われて英語を使うようになったと聞く。どうも民度が低いはなしだと思うのだが、指導教官の勧めもあって、結局私は、ドイツ語で作ったノートから英語の学位論文を書かなければならなくなってしまった。タイプライターで約500枚の分量である。

権威とはなにか。このことを通して私は知ったように思う。八木沼先生は私たちにとって紛れもないクモの権威だったのである。おそらく研究者としての八木沼先生は図鑑を出す前までであって、それ以後の先生はあの図鑑によってうちたてられた権威を守ることに終始されたようだ。そう考えると、八木沼先生のとられた行動にほとんど合点がいくのである。研究者になることはそう難しいことではないかもしれない。しかし権威と呼ばれるにはものすごいエネルギーを必

要とする。

私は研究者として権威の傘の下で平穏に過ごしていたのかもしれない。渡独以来、研究のことでは完全に輸出超過の状態だったので、私は思いきって傘の外へ出ることにした。多少雨にぬれるのもよいのではないかと思った。

1986年2月28日

新版の図鑑がついに発行された。いろいろいきさつがあったので、私は素直に喜ぶ気持ちにはなれなかった。初版にあった属の検索表は姿を消していた。既知種の学名をすべて載せるために削らざるを得なかったとのことだが、25年間何の蓄積もなかったものか。かといって、組合わせで同定するには原色図や部分図が充分とはいえない。博物館で一般の人を対象とした実習をやるとすぐわかるのだが、クモの同定には旧版のほうがずっと使いやすい。分類体系にしても八木沼先生がどう考えておられるかがまったく伝わってこない。外国の学者の意見をつなぎ合わせただけという感が強く、一貫性にかけるところがある。結果的にこうなってしまったことに、私はなぜか自分のことのようにがっかりし、また自分の無力を感じた。

1996年 春

あれから10年間、傘の外へ出ることによって、逆に、私は八木沼先生のお世話を誠心誠意やり遂げることができた。それは、先生の退職記念論文集の刊行や、九州大学出版会から発行された「クモの学名と和名」などかたちあるものとして残った。「クモの学名と和名」の執筆は実は私の学位論文がヒントになっている。学会誌の統一もすべて先生にご相談しながら進めたことであり、先生の望まないかたちで Atypus が刊行され続けるよりは良かったと思う。書き記しておきたいことは山ほどあるが、いつかどこかで、またチャンスがあるだろう。

先生が亡くなられて1年が経った。学会誌の追悼集を編集し責任を果たしたので、墓前にご報告した。クモの研究をはじめてちょうど30年目になる。

八木沼健夫先生のお墓は大阪市東住吉区山坂5丁目15番地の大阪市設松原靈園にあり、戒名を教学院法雲誠健居士と刻まれている。

本文はキシダイアの八木沼先生の追悼集に収められるべきものであったが、私の怠慢から期日を逸してしまったので、ここに載せていただいた。

「人生問題集」

つむじ先生の処方箋



なだいなだ

イラスト 痴痴政治

第二回 毒グモ事件を考える

皆殺しの思想 「へつらこの間」などと書くと、この文章が掲載される雑誌を読む人には不親切だから、この事件が起つたのが、一九九五年の十一月末であることを、ハッキリさせておく。こんな細かいところにまで気配りをするとは、われながら實にサービスが高い。つむじ曲がりが直つたのだろうか。そんなことはどうでもいい。さて何が起つたか。ぼくより若くて記憶力のすぐれた読者は、きっと覚えておられるだろう。そう、大阪の

き添えを食つた別の虫たちも、大迷惑だ。

「ぼくらは人間を刺そうと、あるいは咬もうと思って生まれてきたわけではありません。日本に上陸したのもまたのことです。この土地が、環境的にもぼくらに適してて、餌もあつたから繁殖したのです。人間を食べて繁殖したわけではありません。それなのに、人間はどうしてぼくたちを追寄するのですか？」

ぼくはテレビ画面に向こうから、クモのそういう嘆きの声を聞いたよくな気がした。

しかし、お役人たちの耳に、同じ声が届いたかどうか。

判断してよからろう。

この地上には、一方が他方に害を与えるには生きていけない相手同士もある。だが、住み分けているなら、互いに害を与えないで、共生できる相手もある。そのどちらであるかも判別せず、すぐ排除してしまおうというのは、余りにも安易すぎ、勝手すぎる。種の絶滅の危険はこうしてまた一つ加わる。

阪神大震災以来、危機管理の掛け声で、対応の素早さが評価されるようになつた。今回の行政の対応は、素早いといえども素早かった。その点では及第かも知れないが、このすぐさまの「殺せ、皆殺しにしろ」の対応は、評価を躊躇う。ただ早ければいいのなら、偏見で行動するのが一番いいことになる。それでも早ければいいのだろうか。この対応は、どこか、精神病患者が事件を起こすと直ぐに「狂人を野放しにするな、閉じ込めろ」の声があがる。事件を起こしたのは一人の患者であり、それには個人の事情があつたかも知れないのだが、そんなことは考えようとせず、病人は全部危険だ、閉じ込めろという。これが偏見だ。精神病患者のみな潜在的犯罪者と見なし、事件とは無関係の患者まで閉じ込

めて、ぼくはたまたまテレビでこのニュースを聞いたのであるが、アナウンサーの真剣な顔を見た瞬間、ぞくっと不吉な予感がぼくの背筋を走つた。なにか悪いことが起つりそうな気がした。もちろんクモにとつてだ。ぼくはこういう場合、クモの立場で考えるのだ。もちろん実直な人は、人間の立場で考えるだろう。

不幸なことに、もちろんクモにとつてだが、ぼくの予感は当たってしまった。大した認能だ。雖も寝めてくれないから、自分で寝める。翌日からクモの大暴行が始まつたのだ。テレビは行政が人海戦術で捕獲に乗り出したと報じた。なんとうるさいだろ。まだこのクモが日本人の誰も咬んでおらず、そのための死亡者も入院者もでていないといふのに。ただ毎日持つていて、まるで犯罪を犯したかのような扱いだ。テレビで見てみると、手袋・長靴・覆面で完全武装したお役人たちが、せつせつとのクモを捕らえ、クモにとつては、地下鉄で突然サリンを撒かれたようなものだ。巷

人が人間に噛みついたときもそうだ。人がこの何千年の間、人類とどのように付き合ってきて、人間にどのような奉仕をしてきたかを考えようしない。大嫌いのひとには、全部の大が自分を咬みそうな顎をしてくるように見えるらしい。忠犬ハチ公も、ここほれワンワンの花咲爺の大も、名犬ラフシーも、瞬にしてすべて記憶から抜け落ち、ただ、咬む危険があるかないか、しか問題にならなくなる。この反応は、危険が外国から入ってきたとき、いつも激しく燃え上がる。それが今回の毒蜘蛛のケースだ。

共生の探索 こういう場合、「殺せ、皆殺しだ」の他に方法はないのだろうか。つむじ曲がりのぼくは、あると考へる。共生という方法だ。日本にだって毒をもつた動物はいるではないか。しかも、セアカゴケグモよりもっと強力な毒を持つものが、御存知マムシという蛇、ハブという蛇、それにズメバチという昆虫などだ。これらを「殺せ、皆殺しにせよ」とはいわない。日本人は長年のあいだに、彼らとの共生の恩恵を身につけてきた。そのことが「セアカゴケグモを殺せ、皆殺しだ。さもなくとも安心できない」と考へる人たちの頭からきれいに抜け落ちていく。これまでこれら在来の動物に咬まれた

うやら、かなり広く範囲の人にも及んでくるらしい。

クモは虫の世界のニダヤ人 この騒ぎで、なんでも悪は排除してしまおうというのが、日本社会の体質であることがほの見えた。外国は危険がいっぱい日本は安全だ、といふわゆる安全神話も、この体质とどこか結びついているような気がする。危険なものは外国から入ってくる。それを水際で防がねば日本は危ない。ビストルもエイズも農薬入り食物も、水際で入れないようにしよう。そういう考えの延長にこの毒クモ退治があつたのではないか。

氣の毒なのはクモである。世の中には理由なくクモが嫌いという人が多過ぎる。マンガでもクモのイメージは苦しみ、暴れまわる人間（とくに女性）が多数出て、タンチニラはザグモとして一躍有名になった。だが、博物学者が調べたところ、この恐ろしげな姿の巨大なクモには、人を殺すような毒がないことが分かった。実際には苦しみ暴れていた人は、ほかされたのではなく、ヒステリー発作を起こしていたのだ。それがクモに刺され南欧の有名なクモにタランチュラがある。十五世纪ごろから十七世纪にかけて、このクモに刺されたといふ、苦しめられまる人間（とくに女性）が多數出て、タンチニラはザグモとして一躍有名になった。だが、博物学者が調べたところ、この恐ろしげな姿の巨大なクモには、人を殺すような毒がないことが分かった。実際には

り刺されたりして死んだものはどれだけいるだろう。かなりいるはずだ。そのいわば殺人動物たちが、日本人の安全のために、皆殺しされ、日本の山野から追い出された。日本人は、これらの動物とは、長い経験の末に、共生の道を選んだのだ。それなのに、セアカゴケグモは、見つかってたとん、彼らとの共生の道の探索もせず、すぐさま皆殺しなのだ。なぜか。それが外国から入ってきた動物だからだ。対応のあまりの差にびっくりする。毒を持っていることより、それが「おらが国」に不正入国したことが、もっと重要なことらしい。

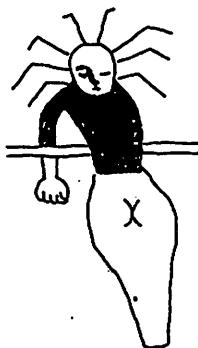
そもそもこのクモが日本に来る前にすでにいた国では、どのような対策が取られているのだろう。それらの国で、毎年、このクモに刺されて死んでいく人が、いつたゞれぐらいいるのだろう。そして、その危険をそれらの国では、どのようにして防いでいるのだろう。ぼくは知りたいが、皆殺しが始まる前に、そうしたことを見るとコメントしてくれたテレビはなかつた。それらの国に旅行する人たちに、このクモに刺されないと注意しろと、これまで親切な情報を流してくれたテレビもなかつた。

こんな自己中心的なメンタリティを持つてるのは、法務省入国管理局の役人だけだと思っていたのだが、ど

たことにされたのだ。ねれぎねだ。農村の女性が裸足で歩いていて、クモと同じ岩の割れ目にすんでいるサソリに刺されたのを、クモに刺されたと間違つて信じた場合もあるかも知れない。いくら人間に好意的になつても、それくらいのことしか考えられない。

今度のセアカゴケグモも、少し世の中が落ち附きを取りもどしたところから、一匹だけで人を殺せるような強い毒は持っていないといわれはじめた。クモはズメバチのように群れを成して人間を襲うようなことはない。生態を知つていてるものなら常識だ。とすればこのクモは、初めからそれほど危険な存在ではなかつたことになる。タランチュラの場合となんと似てゐることだろう。

虐殺されたクモの命は戻らない。たかがクモの命ぐらいといふなけれ。大切なのは命そのものより、命をどう考へるかの方なのだ。



最近なるクモの毒 目の中の毒

1990.8.27

朝日

いじめが分かって、東京大學生部業
最も新奇な学業の葛原健一助手
(元が、先端科学総合研究室で開発された
日本産業会社所属)が発表した。
葛原はこれまで幾種類の蜘蛛を手てさだじ
普段のクモが獲物を獲む方法を
あらわす使いこなして、蜘蛛の捕獲
を説く。また、東京都文京区本
郷の東大校正門前で「アヘン」を採
集する蜘蛛が次に蜘蛛

集した。体格一ぐまのクモ
で、頭だけでも重い蜘蛛。
頭部の毒腺(中心)を取り出
した蜘蛛は「ヘタ」(頭部三十個
巻きいたぐま)と名づけられ、「アヘン」
普段のクモが獲物を獲む方法を
あらわす使いこなして、蜘蛛の捕獲
を説く。また、東京都文京区本
郷の東大校正門前で「アヘン」を採
集する蜘蛛が次に蜘蛛

と並んで、蜘蛛の神経毒が
吸収されないままになっていた。
蜘蛛の毒腺(中心)を取る際、
トクニルハヤヒキ(蜘蛛の毒腺)
の毒腺を取る。オヘン・ヘタ・シムが入る止血剤たる
ムツガヘの一種、アヘンペイカ・ヘタシムは
ムツガヘの一種、アヘンペイカ・ヘタシムは
カルシウムチャカルの酸性溶液
に並んで、「ヘタ」(頭部三十個巻きいたぐま)と名づけられ
ておる。アヘンペイカ・ヘタシムは、蜘蛛の機
械触覚に役立つものだ。



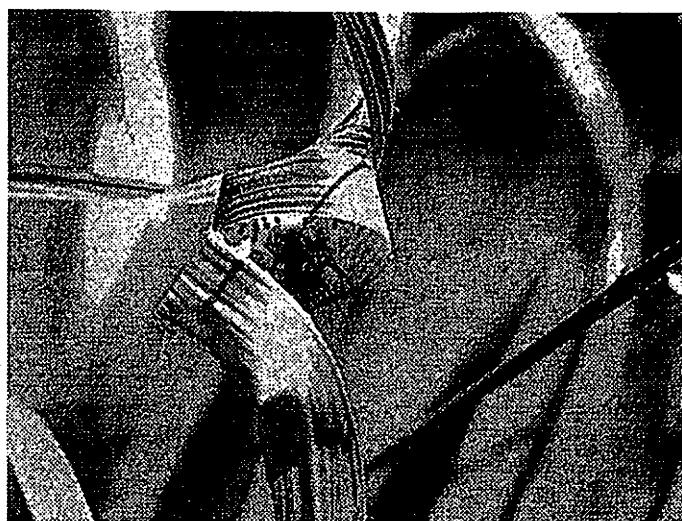
1990.10.25

朝日新聞

梅林 力さん提供

虫の世界

文と写真 安西 英明



ススキの葉の産室を開くと、母グモが攻撃してくる。彼女はやがて子グモに食べられる運命にあることを知っているのだろうか

ススキの葉を風にのせて飛んで分散して飛べるのです。多くの子グモは多くの子グモは

私は自然観察会などでよくこのクモを紹介します。

指でつつかないように注意した上で、産室を開き、母グモが必死になつて卵を守っています。卵の様子を見てもいいま

す。ある時、産室を開けたままではかわいそうだと指摘され、観察会の後もつづけて

度見に行つて、ひなげな母

グモが糸で編んだ巣袋で、

度見に行つて、ひなげな母

グモは開かれたスズキの葉を

戻して再築の最中でした。

た。日本野鳥の会・環境教育

(口ナリーナー)

處は卵を飛ぶ
ところで地中で

と書われ、かまれると痛
い目に遭います。人によつて

はかなりはれます。

カバキワマチグモには
今のところは世界でこのクモ

だけどう変わった習性が

あります。

卵からかえった

うの巣は住居に

子グモたちは、脱皮を終え

ると一斉に雌に食いついて

体液を吸つてから外へ出で

行へます。母グモは卵から

クモの習性 不思議いついぱい

クモは見た目やイメージの悪さがどうしようか、嫌われることが多いようです。でも、中には可愛らしいものや面白いものもあります。また、ウオッチングしてみるとその趣しさは樂しませんで

おもしろいものです。

例えば雄が雌に求婚する方法では、ハエトリグモのようだんぐるをするものが

あります。オシクモのようだ

ですが、雌を糸で縛って交尾

します。雌がその糸を外し

てしまふ間を逃れようと

します。雄ではなく、女

性の姫のねそでですが、雄

にとっては命がけなので

す。ほとんどどのクモでは雌

の方が多いと大きい、雄は

小さいと女性と間

の間を逃れようと

逃れようとしているといふ

のが多いです。でも、中には可愛いし

いものや面白いのがあります。また、

ウオッチングしてみるとその趣しさは樂しませんで

おもしろいものです。

うかつに近づくと獲物と間

じます。

うかつに近づくと獲物と間

じます。でも、中には可愛いし

いものや面白いのがあります。また、

ウオッチングしてみるとその趣しさは樂しませんで

おもしろいものです。

うかつに近づくと獲物と間

じます。

うかつに近づくと獲物と間

じます。

*隔週日曜日に掲載します

提供：笹岡

毎日新聞

梅林 力さん